

桂月の文学碑を訪ねて⑱



「極楽へ こゆる峠のひとやすみ
葛のいで湯に 身をば清めて」

この碑に刻まれているのは辞世の歌で、葛温泉にある大町桂月の墓の前にあります。

桂月は、大正14年4月に葛温泉を終の棲家と定めて、家族ともども本籍を葛温泉に移しました。明治41年に初めて十和田を訪れてから17年目のことでした。

また、同年5月には公的絶筆とされる「十和田国立公園期成会趣旨書」を執筆しています。

桂月の最後の旅は、固雪の八幡岳を経ての七戸への旅でした。この旅を終えて葛温泉へ帰り、紀行文を執筆した数日後の6月6日夜半、吐血

します。翌朝、異変を知った宿の人が「先生、どうしたんです」と叫ぶと「大丈夫だ、騒ぐな」と押し鎮めたといいます。

6月10日、『「皆をここによんでもらおう。暇乞いをするから」というので家の者は皆枕下に集まった。一々礼をのべて別れをつげた。』と桂月夫人の妹である塩井ふくさんは、回想記に残しています。土佐藩士の血をひく桂月は、臨終の際においても毅然とした態度だったそうです。

こうして、桂月は、国立公園指定の朗報を聞くことなく家族や友人、葛温泉の方々に見守られながら息を引き取りました。享年57才。生前自ら決めて準備していた戒名は「清文院桂月鉄脚居士」。



国立公園に指定されたころの子ノ口
～青森県史より～

辞世の歌は

「極楽へ こゆる峠のひとやすみ
葛のいで湯に 身をば清めて」

桂月の長夫人は、次の返し歌を残しています。

「極楽に こゆる峠に杖とめて
しばしはいこへ

やがてまいらん

「ともくに 世をばのがれて

安らけし

山籠もりをと 思ひしものを」

また、桂月とともに一冬を葛温泉で越冬した友人の児玉花外が、桂月を偲んで詠んだ詩があります。

桂月翁の墓（一）

葛温泉の煙や

山を下りこむ春雨や

桂月翁の墓をめぐるて

皆あたたかな情の色

雪の蒲団着て

寒寒からうと思へども

桂月翁の墓なれば

雪の蒲団も情の綿

葛山の春雨を酒として

風流翁に献ぜんか

桜の時は桜酒

紅葉の頃は紅葉酒

この詩は、桂月が亡くなった翌年の大正15年に、花外が東京でつくり、雑誌「桂月」に掲載されたものです。昭和2年には葛温泉にある桂月の墓に詣で桂月にささげる詩「桂月翁の墓（二）」を詠んでいます。

葛温泉には「大町桂月先生終焉の地」の碑があります。また、高知市高知城近くの桂月の生家跡には「大町桂月先生生誕の地」の碑があります。



大町桂月の胸像と「大町桂月先生終焉の地」の碑
～葛温泉敷地内～



※暇…別れ去ること

※一々…ひとりひとりに

問い合わせ先

総務課文書広報係

☎051111内線156